レジスタンス

凡スラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
レジスタンス

【Ｎコード】
Ｎ７５５９Ｖ

【作者名】
凡スラ

【あらすじ】
西暦２０３０年。世界は秘密結社「ヘイワ」による支配を受けていた。
「ヘイワ」によって両親を殺された主人公は、両親の仇を討つために自分と似た境遇の仲間を集め、敵対勢力「レジスタンス」を結成する。
こうして、「ヘイワ」と「レジスタンス」の戦争は、
幕を開けたのであった－－－－
この話は、メイプルストーリーの公式サイトでも投稿しています。

襲撃（前書き）

初投稿です。分かりにくいところもあると思いますが、読んでいただけたらありがたいです。

襲撃

事件は突然起こった。
不意に起きた爆発音。
そして、たたみかけるように響き渡る銃声音。
「なんだ！？」　「敵襲だ！急げ！」　あわてる研究員。
しかし、彼らが叫んだ数秒後には襲撃者たちの持つ銃から一斉に放たれた麻酔弾によって
全員が深い眠りについていた。
そして、襲撃者の一人が「どこにあるんだ、ヘブンは！？」
と、吐き捨てるように言い放ち、奥に進んでいった。

舞台は秘密結社「ヘイワ」の第八研究所。
ここでは、医療関係の物資を作ると共に、裏では軍事関係の兵器等を密造していた。
そして、襲撃者が口にした「ヘブン」とは、
「ヘイワ」が現在製造中の、世界で第二位の大きさを誇るであろう巨大な空母であった。
この事実は当然「ヘイワ」が隠蔽しており、政府はおろか、世界中も知らなかった事実であった。
しかし、襲撃者たちはこの事実を知っていたのである。

研究所の警報が鳴り響く。
その音を皮切りに、警備兵がこの事態を収拾するために襲撃者たちに襲い掛かった。
しかし、襲撃者たちはこれを意図も容易くいなしていく。
「はっ！お前らなんかじゃ話になんねえよ！」
と、襲撃者たちのリーダーらしき男が叫んだ。
瞬間、彼の後ろの二丁拳銃で武装した男が一気に弾丸を放つ。

放たれた弾丸は、すべて警備兵に命中した。
すると、物陰から突如として現れた警備兵が現れ、
「なめやがって、ゲリラ風情が！」
と叫び、持っていた銃の銃口を、襲撃者たちのリーダーらしき男に向けた。
しかし、警備兵が銃を発砲する前に、彼の頭を一発の弾丸が貫いていった。
警備兵は倒れ、リーダーはニヤリと笑った。
「…最高のタイミングじゃねえか」
彼の向いた方向には、スナイパーライフルを構えた一人の男がただずんでいた。
その男は、一キロはあろうかという距離から警備兵の頭を貫いたのである。
「！？」　「なんなんだ、こいつら！？」　「ひ、ひるむな、撃て！」
と、襲撃者たちの実力を恐れ、警備兵たちが慌て始めた。
その時、赤いマスクをつけ、両手にマシンガンを持った男が奇声を上げて警備兵に襲い掛かった。
「な、なんだこいつは！？」　「ま、また新手か・・・っ！」
警備兵が慌てる中、彼はニヤッと笑いマシンガンを掲げ、
「ひゃはははは！！お前らじゃ、‘超人類”には勝てねえよ！」
と、マシンガンを乱射し始めた。
すると、発砲された弾丸は警備兵に当たったが、一部は襲撃者たちに向かってきた。
「あぶねーよ、‘超人類”！」　「あー、悪ぃ悪ぃ」
この会話に、残った警備兵はあいた口が塞がらなくなっていた。
程なくして、襲撃者たちにより警備兵は一網打尽にされ、
研究所の経営者が彼らに捕らえられた。
「おい、ヘブンはどこにある？」　「…言ってどうするつもりだ？」
「決まっている…奪うんだよ」

そしてリーダーはニヤッと笑った。
「あ、そうそう。　なんかヘイワに連絡できるような物ないか？」
と、リーダーが言い、連絡装置を得たリーダーは「ヘイワ」へ向けてメッセージを送った。
「俺たちはレジスタンス。俺たちはヘイワをつぶすため、世界の平和のため、お前たちに戦いを挑む！」
こうして、「ヘイワ」と「レジスタンス」の戦争は、幕を開けたのであった――――――――――

襲撃（後書き）

…ぐっだぐだですいませんｏｒｚ

作戦会議（前書き）

はあ、はあ……、やっと書けました。
時間がかかって申し訳ありませんでしたｏｒｚ

作戦会議

襲撃の後、レジスタンスは「ヘイワ」の第八研究所に残っていた。巨大空母「ヘブン」を収納している倉庫の中で、海への移動を開始しようと作戦を練っていたのだ。

「というか、これを操縦できる奴はいるのか？」
リーダーがメンバー（3名）に問いかける。が、しかし…
「反応なし…ってことは、これは使いもんにならんな…」
そう。彼らの中には空母を操った経験のあるものは、一人としていなかったのである。
「どうするリーダー？　これじゃ宝の持ち腐れだぜ？」
と、副リーダーのサカイ副隊長が苦々しい表情でリーダーに問う。
サカイ副隊長。彼はレジスタンス唯一の狙撃者で、その実力はかなり高いものだ。
先ほどの襲撃の際にも、多くの戦果を挙げている。
「そうだ、どうすんだよ？　こんなもん、処分したほうがいいんじゃねえか？」
と、もう一人の副隊長、ヤブウチ副隊長が発言した。
ヤブウチ副隊長。彼は二丁拳銃のエキスパート。前線での戦闘を得意としている。
先ほどの襲撃の際、サカイ副隊長やリーダーにも引けを取らない活躍を見せている。
「いや、処分は行き過ぎてる。　なんとか利用したいんだが…」
リーダーは困り果て、頭を抱えて考え出した。
「おい、“超人類”もなんか案を出せよ、思いついたら手を上げろ」
と、サカイ副隊長が“超人類”と呼んだ人物に顔を向ける。
“超人類”。　彼はレジスタンス一の危険人物。
彼は戦闘になると、様々な兵器で武装し、奇声を発しながら敵兵に

突っ込んでいく。
その姿は鬼神のようで、味方すら恐れる人物である。
ちなみに、なぜ“超人類”と呼ばれているのかは不明である。
「え～、やだよそんな面倒くさい……」
「お前なぁ…」
この態度には、サカイ副隊長もあきれ気味だ。
「しょうがない。　2人で考えるぞ」

それから1時間ほど、副隊長らは「ヘブン」の使い道を考えていた。
「ばらして物資にすればいいんじゃねえか？」
「いや、こんなばかでかいものを分解するのは時間がかかり過ぎる」
「どっかの施設とかにうっぱらったらどうだ？」
「いや、まず売った瞬間に捕まるだろ」
「そもそもなんでこれを使うんだ？」
「リーダーの考えに文句があるのか貴様」
あまりいい意見は出なかった。

数時間後。
「よし、こうするか」
リーダーが立ち上がり、メンバーに説明を始めた。
「とりあえず、ここの職員を使う」
「？　なんで？」
「操縦できる奴が一人もおらんのに、ヘブンを使えるはずがないだろが」
「あ、なるほど」
「その先は後で説明する。　とりあえず職員を集めるぞ」
「了解」

さらに数時間後。
「よし、これで全員だな？」

倉庫の中には、３０～４０名ほどの職員と、２０～３０名ほどの警備兵が捕獲されていた。
「へえ、けっこういるもんだな」
すこし感心した様子のヤブウチ副隊長がつぶやく。
「まあいい。　じゃ、話を聞こうか」
リーダーがメンバーに告げ、職員達への質問が始まった。
「おい、この中にヘブンを動かせる奴、またはメンテナンスが出来る奴はいるか？」
リーダーが職員長らしき人物に問う。
「……ああ、一応」
「ならよかった」
リーダーはニヤッと笑う。
「んじゃ、ここの職員、全員俺達の捕虜にさせていただく」
「！？」
その言葉に、その場にいる誰もが沈黙した。
「……なるほど」
サカイ副隊長はリーダーの考えを理解し、リーダー同様にニヤッと笑った。
「じゃ、そういうことで、はいはいヘブンに乗った乗った～」
リーダーが職員達を誘導する。
その言葉に抵抗する事も出来ず、職員達は次々とヘブンに乗り込んでいく。
「あーそうだ、通信機は全部回収させていただく」
「……ちっ」
「当たり前じゃねえか。　それで俺達の居場所がばれたら元も子もないだろ？」
「……」
職員長の最後の抵抗もむなしく、職員達は全員ヘブンに乗り込んだ。
「これでよし……っと」
最後の確認を済ませ、レジスタンスたちもヘブンに乗り込んだ。

「でもよ、なんで職員全員を捕虜にしたんだ？　少人数でもよかったんじゃ…」
ヤブウチ副隊長がリーダーに問いただす。
「メンバーは多いほど戦力になるしな」
「でもよ、中には反逆を考える輩もいるんじゃ……」
「まあいいじゃねえか。　なんとか説得して、仲間に取り込もうぜ」
「……あんたって人は…」
ヤブウチ副隊長も、さすがにあきれた。

「よし、今日はここで休むか」
「…よりによって敵の基地の中かよ…」
「まー、なんせ今は夜中だしな」
職員達を誘導した後、レジスタンスは工場内の物資や様々な計画書を回収して回り、
それらをすべてヘブンに積み込んだ。
「これで当面は食料に困らなくなった」
ニヤッと笑うリーダー。
その顔を見て、副隊長2人もあきれっぱなしだ。
「ま、今日はとにかく寝ようや、さすがに疲れた」
「……ま、そうしますか」

こうして、夜は更けていったーーーーーーーーーーーーーーー

作戦会議（後書き）

次ははやく投稿できるようにがんばります。

夜襲（前書き）

やっと書けた……。
今回は急展開！（なのか！？）

夜襲

その日の夜。レジスタンスのメンバーは、研究所に残っていた物資をヘブンに積み込み、
出航の準備を進めていた。作業もほとんど終わり、あとは出航をするだけという状況である。
疲れたメンバーは、研究所で拘束した研究員３５名をヘブンに押し込み、ヘブンの操縦席で眠っていた。
その時、迫ってくる人物の存在も知らずにーーーーーー

真っ先に異変に気付いたのは“超人類”だった。
彼はその人並みはずれた聴力で、誰よりも早く変化に気付けたのだ。
（なんだ？　この足音は……？）
そしてその音を聞いた瞬間、“超人類”は今自分達がどのような状況に置かれているのかを理解した。
（うそだろ！？　なんでこんなに早く気付いたんだよ！）
そして“超人類”は、レジスタンスのメンバーを起こしにかかった。
「おい、起きろよリーダー！」
「うーん……、あと５分……」
「なに言ってんだ、この人は！？」
「ん…、おお、どうした“超人類”？」
「急げ、ヘイワが攻めてきやがった！」
「なに！？」
一瞬寝ぼけたリーダーだったが、すぐに現状を理解し、周りのメンバーを起こしにかかる。
「おい、起きろヤブウチ！」
「ん～？なんだ？」
「敵襲だ！」

「は！？」
「起きろ、サカイ！　敵襲だ！」
「なんだと！？」
覚醒するメンバー達。なんだかんだ言いつつ、反応は早い。
「どうすんだ、リーダー！？」
「くっそ……、あまりにも襲撃のタイミングが早すぎる！　というか、なんで居場所がばれた！？」
「昨日放送ジャックしたからだろ！？」
「あ」
『あほか！！』
「しまった……」
「つーか、ほんとにどうすんだよ！？　あいつら、大軍で来たぞ！？」
「とにかく、逃げるぞ！」
『逃げんの！？』
「当たり前だ！　逃げるのも作戦の内！」
「ここは迎撃じゃねえの！？」
「死にたいか、貴様！？」
「よし、逃げるぞお前ら！」
「意見変えるの早っ！」
漫才を交わしつつ、出口を目指す一同。
「何処にあんだよ、出口！？」
「昨日説明したじゃん！？」
「そうだっけ？」
「オマエの記憶力はどうなってんだ！」
一向は迷いつつもなんとかヘブンの出口に着いた。
「よし、出るぞ！」
リーダーが思いっきりドアを開けた。
そこには、

「やあ、レジスタンスの諸君。　……会えて嬉しいよ」

ヘイワの四大将軍、レオが大軍を引き連れて、立っていた。

夜襲（後書き）

更新が遅れまくった事に謝罪します。
本当に申し訳ありませんでした。

雨（前書き）

……本当に遅れて申し訳ございません……；；

第４話、どうぞ。

「なんで……あんたが居るんだ！？」
悲鳴を上げるヤブウチ副隊長。
「決まっているじゃないか。　お前達を捕まえるためさ」
ふっと薄ら笑みを浮かべ、レオは言い放つ。
「まさかお前達から居場所を伝えてくれるとは……、感謝するよ」
「くそっ……」
『俺達は悪くない。　こいつがやったんだ』
「なにい！？　お前ら俺を裏切るつもりか！？」
薄情なメンバーの対応に泣きそうになるリーダー。
「はっはっは。　リーダー、こんな状況にそんな嘘をつけるわけないだろ？」
「黙れ“超人類”。　その満面の笑みはなんだ」
「っち……」
「殺したろか、お前」
「はあ……、何をいっているんだか」
あきれきるレオ。
「さて、どうする？　お前達に逃げ場は無いぞ？」
「……仕事が早いこって」
「どうも」
その言葉どうり、逃げ場は完全に閉ざされていた。
その様子を見た“超人類”は銃を抜くが、
「無駄だ。　お前が銃を撃った瞬間、お前達は蜂の巣だぞ？」
「くそが……っ！」
“超人類”の様子を見て一斉に銃を抜き、威嚇するレオの兵士達。
その様子をみて、舌打ちをする“超人類”。
「さあ、おとなしく捕まって貰おうか」
「く……っ」

歯軋りをするサカイ副隊長の顔には、自分はこの状況でなにも出来ないという
無力感から来る悔しさが滲み出していた。
そして、しばらく沈黙が続く。

「……しかたない、腹ぁくくるか」
その沈黙を破ったのは、リーダーだった。
「降参だよ。　あんたらには負けた」
『リーダー！？』
「ほう、お前はまだ、物分りがいいようだ」
「当たり前だ。　ここで野垂れ死ぬよりも、捕まってチャンスを待つ方が賢い」
このリーダーの意見を聞き、レオは感心したように呟く。
「賢明な意見だ。　……お前の才能は、実に惜しい」
「お前らも……、ここで捕まる方が、今死ぬよりは何百倍もマシな筈だろ？」
「でも……っ」
「いいから。　今は、とにかく耐えるんだ」
そうメンバーに言い聞かせながら、リーダーは頭の上に手を上げる。
「……しかたねぇ、ここは捕まっとくかぁ」
「……くそっ！」
いまだに諦めきれないといった表情のヤブウチ副隊長。
全てを諦めきったのか、リーダーと同じように手を上げる“超人類”。
そして、先ほどから下を向き、ただ黙って悔しさを噛み締めるサカイ副隊長。
そんな彼らを見ながら、レオは黙って兵士達に指示を送る。
彼らを見るレオの表情は、何故か何処と無く悲しげに見えた。
研究所の外に出る際、最後にレオはリーダーに小さく呟いた。

「……いい刑務所ライフを、レジスタンス一行様」
「黙れ、クソ野郎」
「ふん……、まあ、お前とはもう二度と会うことはないだろうがな」
「安心しろ……、“不死鳥”は必ず蘇るさ」
この時交わされた会話を、レジスタンスのメンバーは誰も知らない。

刑務所行きの護送車に乗り込む際、リーダーの頭に冷たい物が降って来た。
その物質の正体が分かり、ふっと自嘲気味に、リーダーは呟いた。
「雨、か……」
その雨は、レジスタンスの敗北を象徴するような、冷たく、暗い雨だった。

雨（後書き）

いや……、ほんとごめんなさい；；

ちなみに、この後３～４話はシリアスっぽい話が続きます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7559v/

レジスタンス

2011年11月1日02時24分発行